

『目標を目指して一心に』 コリント人への手紙第二5章11～15節 2016.4.17(礼拝説教より)

『…キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。』
Ⅱ コリント5:15

◆パウロが、あの試練に満ちた伝道生涯を、最後まで挫けず、諦めず、力強く駆け抜けた、その動機と支えは何だったのか？それは第一に『主を恐れる心があったから(11 節)』だという。主を恐れるとは、神を畏れ敬い、従う心のこと。何より人は、すぐそばにおられる神を知る時、恐れおののく。しかしその神が、この罪ある者を、それでもなお愛し、赦し、救ってくださると知った時、心砕かれ、謙り、正しい人生へ回復される。

◆祈りには4つの要素がある。①神に話す⇒②神が聞く⇒③神が語られる⇒④神の声を聴く。どんなに祈りの言葉をスラスラ連ねても、傍で耳を傾け、聴いておられる神を実感しているだろうか？祈りっぱなしで、神の答えを受け取らないことはないだろうか？心を空っぽにして、御前に静まり、『主よ、お語りください、しもべは聴いております』と待ち望む者こそ、主を恐れかしこむ姿。その人は、臨在の主と共に歩み、その知恵に生かされ、力強い人生を歩む！

◆パウロは、「気が狂っている(使徒 26 章)」と言われるほど、熱心に篤く、キリストの救いと神の愛を宣べ伝えた。それは「神のため…あなたがたのため(13 節)」だった。ある母親は「信仰って自由！子供が信じたいと思えば信じればいいので強要しない」と語った。聖書の告げる「永遠の滅びや神の裁き／罪からの救いや永遠の命、天国の慰め」は、まるで絵空事なのか？キリストの救いへの信仰は、あってもなくてもいい趣味程度なのか？そこには現実感も危機感も何もない！教会が、必死に伝えるのは、『一人も滅びないように』、罪とその罰から救ってくださる神の愛である。

◆パウロは、嫌々、渋々ではなく、「キリストの愛に迫られて(14 節)」伝道生涯を駆け抜けた！感謝に溢れ、喜びに満たされ、その歩みは力強かった！人は、自分が愛されていると実感できる時、少々の試練や困難があっても生きてゆける。時に人は裏切り、嘘をつく。その心も生活も社会もどんどん移り変わっていく。しかし絶対に変わることはない神の愛がある。不真実で、不従順な私たちを、どこまでも愛し、赦し、忍耐して裏切らない主の愛がある。

★今週、このキリストの愛に感謝し、臨在の神を恐れ敬い、その愛を証する機会を持とう。